

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目 バリ島の鉄製鍵盤打楽器 スロンディン文化のトウガナン・プグリンシンガン村の事例分析

氏名 野澤 暁子

論文内容の要旨

本論文の扱う「スロンディン selonding」とは、バリ島の一部の村落に伝承される古い形態のガムラン音楽である。その特徴は、「ガムラン楽器の中で唯一、鉄を鍵盤の素材とする」という点と、「伝承村落で楽器自体が神聖視されている」という点にある。

本論文では、トウガナン・プグリンシンガン村を事例に、この村が伝承するスロンディンの音楽学的分析をふまえた上で、その社会的・宗教的機能の分析を行った。

第一部では、調査村であるインドネシア共和国バリ島トウガナン・プグリンシンガン村の社会的文化的特徴について明らかにした。この村は、バリ島の古層文化を伝承する先住民「バリ・アガ」の一つとして、一般の村落とは異なる社会的・文化的特徴をもつ。それは、以下の三点に集約される。

一点目は、村内婚を基準とした村落内の差別構造と二重文化構造である。

トウガナン・プグリンシンガン村（人口 571 名）は、西部落、中部落、東部落の三部落からなる。このうち、西部落と中部落が、村内婚の慣習を遵守する成員の居住区である。この二つの部落は「プグリンシンガン」という集団単位で呼ばれる（301 名）。一方、東部落は「パンデ」と呼ばれ、外来者やプグリンシンガンの資格喪失者の居住区となっている（270 名）。

プグリンシンガンとパンデの間には、前者を優位、後者を劣位とみなす明確な差別関係が存在する。この関係から、パンデ住民は、プグリンシンガンの儀礼への参加、プグリンシンガン所有の施設（寺や集会所）への立ち入り、プグリンシンガン伝統衣装の着用等が一切禁じられている。村内婚で結びついたプグリンシンガンは、村の正統な文化を伝承する高位の集団とみなされているのである。この関係は、プグリンシンガンが固有の伝統信仰と社会構造を維持するのに対し、パンデはバリ・ヒンドゥーにもとづいた一般村落と同じ様式に従うという、一村落内での文化的二重性を生み出した。

二点目は、「地主村」としての性格である。プグリンシンガンの最大の特権は、広大な水田（約 224ha）の所有権である。昔からプグリンシンガンは、近隣の 7 村落の農民を小作人として従える地主集団として、共有田の収穫に依拠した生活を送ってきた。村内婚の慣習は、この財産を分散させないためにある。この経済的背景から、プグリンシンガンの人々は一種の貴族的身分として、年間 100 日以上に及ぶ複雑な儀礼文化や、特権の象徴である緋布など、独自の文化を発展させてきた。

三点目は、固有の伝統信仰である。プグリンシンガンの信仰は、自然崇拜、稲作文化、ヒンドゥー文化が混在した、多層的性格をもつ。その信仰形態は、一般村落におけるバリ・ヒンドゥーの様式とは、大きく異なる。プグリンシンガンの信仰文化は、地主村としての経済力に支えられてきた。

以上から、マジヤパヒト到来以前の古層文化、地主村としての経済力をもった社会集団の一事例として、調査村の社会文化の特徴を示した。

第二部では、バリ島および調査村に伝承される鉄製鍵板打楽器「スロンディン」の特徴と由来について考察を行った。

スロンディンは、島内で 14 村落に伝承される。その分布的特徴から、北東部の高地を中心に広まる、「高地の音楽」と位置づけることができる。

スロンディンの由来に関しては、ジャワ島とバリ島に残る歴史資料から、一つの可能性として 12 世紀頃が成立年代であると考えられる。またこれらの資料を編纂したジャワ島のクディリ王国とバリ島のワルマデワ王国は、共に稲作を経済基盤とし、同盟関係にあった。ここから、農具と同じ鉄を素材とするスロンディンが稲作を背景に誕生し、王国間の同盟関係を通じて伝播した可能性を指摘した。

調査村におけるスロンディンについては、調査から以下二つの特徴を挙げた。

一点目は、「鉄の超自然性」にもとづく宗教的機能である。プグリンシンガンのスロンディンは、一種の神具として扱われ、儀礼での重要な文脈に組み込まれている。特に神器の「三枚の鍵板」と儀礼での奉納演奏は、「生命力の導入」の意味をもつ。

二点目は、集団統合としての社会的機能である。調査村のスロンディンは、プグリンシンガンの特権文化の一つとみなされている。例として、プグリンシンガン以外の者による接触が禁忌とされている。ここから、スロンディンが「地主村」としての特権性を象徴する機能をもつことがわかる。これはスロンディンが「神聖」という記号とともに、村内婚にもとづく社会を維持する求心的装置であることを示している。

さらに音楽学的調査から明らかになったのは、調査村のスロンディンの高度な表現様式である。このスロンディンは 8 台の楽器による 4 種の編成法、7 種類の調使用、100 種以上の楽曲から構成される。これらは複雑な音響コードを形成し、儀礼進行を司っている。調査村のスロンディンは、神聖という象徴的価値、そして儀礼演出機能の観点から、バリ古層文化の社会と信仰における音楽の統御力の一例を示している。

第三部では、プグリンシンガンの伝統暦の新年に行われる「一月儀礼」におけるスロンディンの宗教的機能を論じた。

一月儀礼は、共有田における上半期の稲作に先駆けた豊穡儀礼である。この意義から、一月儀礼の幕開けには神女的役割の女性によって「聖なる粥」が炊かれ、神々に供えられる。この点において、一月儀礼は稲作的要素を含む。

だがその一方で、この儀礼には「山・海」という二項対立性からなる伝統的世界観も反映されている。この世界観において一月儀礼は、山側の男性神と海側の女性神の出会いによって誕生する、新年という新たな時間的生命を寿ぐ行事である。その体現として、儀礼の中盤以降では、未婚男女の社交舞踊が行われ、男女の出会いの祝祭が展開する。

つまり一月儀礼とは、稲作、自然界、人間界の豊穡を祈る儀である。調査の結果明らかとなったのは、スロンディンが豊穡性を呼び込む力として演奏される点である。特にスロンディンが「男性性と女性性の出会い」の文脈において、青銅楽器ガンサを加えた合奏を行う特徴点が観察された。ここから、金属音による強烈な音響空間の創出が、豊穡をもたらすポジティブな意味でとらえられていることが明らかとなった。また必ずスロンディンが神霊の方位である東に向けて演奏されるという方角的規則性から、この奉納演奏が「山・海」の対比を象徴する舞踊と一体的に、「山→海→東→山」という生命の流れを表す循環的世界観に力を与えていると分析した。

以上を総合し、最後では「スロンディン＝神聖」という価値観が生まれた要因を考察した。筆者は分析の結果、スロンディンの神聖性は第一に、鉄を特別視する意識を源泉に、バリ島の一部の社会集団においてこの鉄製鍵盤打楽器が社会的・信仰的求心力としての価値をもった結果であると考えた。トゥガナン・プグリンシンガン村の場合、スロンディンは地主村の権力象徴としての意味が付加され、さらには自然環境にもとづく伝統信仰の儀礼表現にとりいれられた。以上から筆者はスロンディンを、稲作文化的要素と、バリ島の自然環境が育んだ基層文化的要素との交錯点に根を下ろした音楽文化であると結論づけた。